

保育者養成校における就職に対する不安への一考察

－ 卒業前・後のアンケート調査を通して －

岡 田 恵

松山東雲短期大学

An Examination of Anxiety about Employment in Preschool Teaching Training School

－ Revealed through pre and post graduation surveys －

Megumi OKADA

Matsuyama Shinonome Junior College

Kuwabara, Matsuyama

(Received Jan. 17, 2020)

要 旨

本研究は、卒業前後の職務に対する不安や気持ちを分析し、養成校における必要な授業内容や教育相談内容について考察を行った。

養成校での2年間の学びの中で、様々な学習や実習を通じて経験してきたことを振り返りながら、新任保育者として子どもたちから「先生」と呼ばれたり保護者から褒められたりという経験をすることで、喜びを感じていることが考察された。今後、卒業前から保育者への移行期間に、自身が就職先に選択した場に必要な情報の提供に対して、個別に教育相談をする必要があるのではないかと考察される。

1. 問題と目的

近年、大学や短期大学を卒業しても就職できない学生、働く意欲を持たずフリーターやニートになってしまう学生が増加している。このような状況であるにもかかわらず、保育系の学生の就職は安定している。表1-1は、保育者養成校（以下「A校」）の進路分布を入学年度別に示したものであるが、いずれの年度の入学生も大半が保育職へ就職している

ことがわかる。

なお、保育職以外に就職した学生は自ら希望して保育職以外へ進んでおり、就職氷河期の再来と呼ばれる時期の中でも、全員が希望の進路に進んでいる。

保育職の就職とはどのようなものであろうか。海野¹⁾(2010)は一般企業への就職と保育系への就職との違いについて、保育職の求人時期が秋に集中すること、重複受験を認めない不文律があること、保育現場との信頼関係が就職に一定の影響を与えてい

ることの3点をあげ、養成校が担うべき責任について考察し、養成校の就職支援は学生と保育現場の利益にかなったものでなくてはならないと結論を出している。

A校の平成26年度および平成27年度の就職内定率は100%であった。A校在籍学生は、保育士への就職が多数であることが伺える。

保育職と一般企業とは、採用募集時期と就職活動期間に大きな違いがある。(表1-2)

一般企業の場合、1年生の1月頃からエントリーの受付がはじまり、2年生の4月から採用選考の開始、5月から7月頃にかけて内定を出すという流れが一般的である。

表1-1 進路分布

職種	平成 27 年 卒業生(人)	平成 26 年 卒業生(人)
保育士	74	84
幼稚園教諭	33	10
小学校 SSC	1	1
養護教諭補助員	1	0
支援員	9	27
児童生活指導員	2	1
チャイルド マインダー	3	1
水泳インスト ラクター	2	1
一般企業	6	3
進学	2	0
未内定・その他	1	0

保育職の場合は、2年生の9月から採用募集が本格的に始められ、10月を中心に採用選考、内定を出すという流れである。そのため就職活動時期は一般企業では、1年生の1月から始まるのに対し、保育職の場合は2年生の9月頃から本格的に活動を始め

ることになる。また、保育系の学生の2年間は実習を中心に構成されている。一般企業のエントリーが始まる時期に保育所実習Ⅰが、採用選考のピーク時に教育実習と施設実習Ⅰが重なっていることがわかる。保育職の募集が9月から本格化するため、養成校の多くは2年生の前期に実習を終え、就職活動に専念できるようにしている。A校では、1年次より就職支援として「ライフデザイン」科目において、「社会人常識マナー」や、就職で活用できる「Word・Excel 検定」、面接や履歴書の書き方を集中講義で実施する「就職合宿」などを取り入れている。

また、保育職就職の支援だけではなく、学生生活の送り方や実習支援等も含めた指導を担当が中心となり相談支援を行っている。

A校における保育職の就職活動は、2年生の9月から本格的に開始されるため、2年生の7月より、履歴書の書き方や筆記面接試験対策、実技指導を行う。受験する園が決まった学生については、園によって試験内容が異なるため、個別の試験対策も行っている。実習時期と自己効力感との関係などを考察した三木・桜井²⁾(1998)は、実習が保育者効力感を高めることを明らかにしている。

一方、石川³⁾(2005)では、実習を経ると逆に保育者効力感が低くなるという結果を出している。両者の結果は全く逆ではあるが、実習が保育者効力感に与える影響が大きいことは理解される。このように実習が学生に与える影響が大きいということは、実習を経験すると学生の進路への希望に変化があると考えられる。

上述した通り、A校においては、就職率は100%であるものの、不安を抱きながら職務を遂行している保育者もいることが想定される。

そこで、本研究では、保育実習のタイミングと合わせて就職に関する心配や不安に関する質問調査を実施し、卒業前後の職務に対する心配や不安について分析を行い、養成校における必要な教育相談について考察を行う。

表 1-2 保育職と一般企業の就職活動期間

月		保育職	一般企業	
1 年次	1 月	保育実習 I (保育)	エントリー受付開始	
	2 月		↓	
	3 月			
2 年次	4 月			会社訪問・企業説明会
	5 月		↓	
	6 月	保育実習 I (施設)		内定通知
	7 月	公立保育園受験要綱配布		
	8 月	公務員(保育士)試験		
	9 月	教育実習 I・II 実習開始		
	10 月	内定通知		
	11 月	↓		
	12 月			保育実習 II
	1 月			
	2 月			
	3 月			

2. 研究の方法

(1) 対象

卒業前：保育士・幼稚園教諭免許を取得し卒業する予定の 2 年生 40 名

卒業後：卒業後 2 か月が経過し保育職に就いた新人保育者 17 名

座談会参加者：20XX 年 3 月 保育士養成校卒業生 7 名 1 時間程度実施

1) 座談会の方法について

座談会は、A 校を卒業前に実施したアンケートを依頼する際に、就職後 1 か月を過ぎた時期に、近況報告会を実施することを伝え、保育に関する相談や悩みを相互に分ち合う会を実施した。

2) 座談会参加者について

筆者、A 校教員、保育士養成校 B 大学教員の 3 名及び 20XX 年 3 月に A 校を卒業した学生 7 名であった。座談会対象者のプロフィールは以下の通りであった。

- A：障害者施設 職員（保育士）
- B：私立幼稚園 教諭 4 歳児担当
- C：公立保育園 臨時保育士 2 歳児担当
- D：私立幼稚園 教諭 3 歳児担当
- E：フリーター 飲食店勤務
- F：私立保育園 保育士 1 歳児担当
- G：私立保育園 保育士 2 歳児担当

(2) 研究期間

20XX 年 2 月～20XX + 1 年 5 月まで

(3) アンケート実施方法と内容

アンケートの作成および設問は、以下の項目について自由記述にて回収を行った。

1) 卒業前・後アンケート

卒業前：養成校で学んだことを活かしながら、卒業後保育所等で勤務するにあたり、どのようなことについて心配や不安があると感じますか。

卒業後：「学校で学んだことが職場でいかされていますか」「子どもとのかかわりでの悩みはありますか」

2) 座談会の環境

聞き取りという調査内容で、筆者、A 校職員、B 大学教員が座談会に身を置き、直接対話を行う。

(4) データの収集及び分析方法

1) 卒業前・後アンケートについて

学生のアンケートの結果は、K J 法の手続きに従って行った。筆者と B 大学で保育・教育学を専門とする教員の 2 名により行われた。分析者は、発達臨床の経験と養成校での教育経験をもち、得られた分析のみならず、倫理的な配慮においても信頼できる人物である。

データの分析は、以下の手順で作業が行われた。学生の記述に対して、2 名が一通り目を通した後「単位」として抜き出した。次に、合議しながら類似した単位ごとに分け、一時的にグループの編成を行なった。同様にまとめたグループとの比較を行いながら、表札を付けて小カテゴリーを編成し、要約したカードにまとめられた。小カテゴリーの表札に類似性があるもの同士がまとめられる場合には、類似性のあるものをまとめて大カテゴリーの編成を行

なった。得られた分類結果の妥当性を高めるために、臨床心理を専門とする B 大学教員に加わってもらい、再検討を行なった。そこで得られた結果を最終的な分類結果とした。

2) 座談会について

座談会の記録は、ワードプロセッサを用いて 1 名の教員が記録を行った。得られた記録を逐語録として分析した。上記のデータは研究参加者の声をできる限り研究に反映したい思いから、得られたデータをそのまま記述することで、背景にある思いを筆者が意図をくみ取り、記述することとした。

(5) 倫理的配慮

本研究にかかるアンケートについては、個人情報の取り扱いには十分配慮し、特定できるような処理の仕方はしないこと、記入した内容は研究の目的以外には用いないこと、結果及び成果は学会等で発表するが、個人のプライバシーに関する事項が公表されることは一切ないということを口頭にて説明し同意を得た。併せて筆者が所属していた所属長へ、本研究の趣旨や個人情報の遵守などを説明し、承認を得て行った。

3. 結果

(1) 卒業前アンケートの結果

アンケート結果の記述を K J 法により分類し、表 1－3 に示した。卒業前には、6 個のカテゴリーが抽出され、「子どもとのかかわり」「子どもの発達の理解」「他者との協働」「保育方法の実技の獲得」「保護者とのかかわり」「学んできたことを活かせるか」で構成された。記述数からも、子どもとのかかわりや、子どもの発達の理解などについて不安が大きいことが推察された（卒業前に抽出された学生の記述表 1－3）。

表 1－3 卒業前に抽出された学生の記述

カテゴリー	記述例	件数
子どもとのかかわり	子どもにどのように関わっていくか	5
子どもの発達の理解	子ども一人一人をしっかりと理解し、その子どもにあった関わり方ができるか	6
他者との協働	先生同士のかかわり	8
保育方法の実技の獲得	ピアノを弾けるか・絵画制作	2
保護者とのかかわり	保護者との関係性・信頼関係	6
学んできたことを活かせるか	学校で学んだことが就職先で活かせるか不安	4

(2) 卒業後アンケートの結果

アンケート結果の記述をKJ法により分類し、表1－4に示した。卒業後には、6個のカテゴリーが抽出され、「子どもとのかかわり」「子どもの発達の理解」「他者との協働」「保育方法の実技の獲得」「保護者とのかかわり」「学んできたことを活かせるか」で構成された。記述数からも、他者との協働や保護者とのかかわりについての不安が大きいことが推察された（卒業後に抽出された学生の記述表1－4）。

4. 考察

(1) 卒業前・後アンケートについて

アンケート結果を分析し、前後で比較をおこなったところ抽出されたカテゴリーのなかから「他者との協働」「保育方法の実技の獲得」のカテゴリーの個数が増加した。一方、「子どもの発達の理解」「学んできたことを活かせるか」のカテゴリーの個数が減少した。

また、卒業前、卒業後ともに「先生同士のかかわり」についての記述が多いことがアンケートにより

表 1－4 卒業後に抽出された学生の記述

カテゴリー	記述例	件数
子どもとのかかわり	子どもの発達にあわせた保育ができているか	5
子どもの発達の理解	子ども一人一人をしっかりと理解し、その子どもにあった関わり方ができるか	1
他者との協働	先生とうまくやっているといるのか	9
保育方法の実技の獲得	ピアノを弾けるか・絵画制作	4
保護者とのかかわり	保護者との関係性・信頼関係	6
学んできたことを活かせるか	学校で学んだことが就職先で活かせるか不安	2

明確となった。

このことより、卒業前には養成校で実習やボランティア活動などで、子どもとの関わる経験を行っていることが、実際に就職で活かされる反面、職場の人間関係や園の保育目標に沿った保育技術が不安や悩みとなっていると推察された。

(2) 座談会について

座談会の逐語録を表1－5に示した。逐語録からは、大きく分けて以下の7つに関する発話が抽出された。

1つ目は「手探りで毎日やっている。自分の出身園。親子遠足は緊張した、保護者の前で、バスガイドみたいに。」「保護者会の役員と園職員との飲み会に行った。言葉遣いに気を使った。むしろ保護者のほうがラフだった」と保護者に関する発話が抽出された。

2つ目は「反省をしっかりと書け」「経過記録を書いている。子どもの様子、月のねらいはリーダーが一つ考えるがそれ以外は自分で考える。手書きで記載している。わりと適当で、書いてあればいい。でも、保育用語を使わなければならない。」「下書き書いたら全部直される。」「書類が書けない。」など文章の記述に関する発話が抽出された。

3つ目は、「イラッとするときがある。」「子どもはかわいい。」「お代わりにくる子、こぼす子がいる。」「子ども、言うこときかずイライラする」等、子どもの言動に対する発話が抽出された。

4つ目は、「一番大変なのは気になる子。なぜ泣いているのかわからない、でも少しわかるようになってきた。発達が遅れている。」「気になる子、家庭環境もある。」等、気になる子どもや家庭環境に関する発話が抽出された。

5つ目は、「排泄の自立、うれしかった。」「ボタンとめた、うれしかった。」等、子どもの成長や発達に関する発話が抽出された。

6つ目は、「学校の授業で2年生後期にピアノなのはだめ！子ども歌をもっと弾いたほうがいい。」

「ピアノ弾けない。ペアの先生に弾いてもらっている。」ピアノ技術に関する発話が抽出された。

7つ目は、「朝の保育の人数調整で保育士同士の人間関係がきつい。」「職員同士が楽しい」「手あそびやあそびをととてもよく知っていて」人間関係に関する発話が抽出された。

5. 総合考察

本研究では、A校の卒業生を対象として、アンケートと座談会を実施した。卒業前アンケートでは、「養成校で学んだことを活かしながら、卒業後保育所等で勤務するにあたり、どのようなことについて心配や不安があると感じますか」についてアンケートを行った。卒業後アンケートでは「学校で学んだことが職場で活かされていますか」「子どもとのかかわりでの悩みはありますか」の質問を行った。その結果、卒業前には、「子どもとのかかわりや、子どもの発達の理解などについて不安」が大きいことが示唆された。一方、卒業後には「他者との協働」「保育方法の実技の獲得」についての不安が大きいことが推察された。

座談会では、得られた逐語録から、卒業生から大きく分けて「保護者に関する発話」「文章の記述に関する発話」「子どもの言動に対する発話」「気になる子どもや家庭環境に関する発話」「子どもの成長や発達に関する発話」「ピアノ技術に関する発話」「人間関係に関する発話」上記の7つの発話が抽出された。就職後半年から1年というわずかな時間しか経ていないことから、保護者や同僚・上司から育ててもらっていることが推察された。また保育技術に対する自己評価は低く、授業で学んだことが十分に活かされておらず、保護者対応の仕方や、子どもの様子を十分に捉えて行う速やかな立案など、日々の実践の積み重ねではないと身につかない技術もあることがうかがわれた。また、社会情勢を反映し、気になる子や個々の家庭環境に応じた配慮やかかわりに対する知見が不足していることが推察された。

表 1－5 座談会の逐語録

発言者	発話内容
筆者	近況をお教えてください
E	在学時から、保育の仕事に就かないことを決めていた。接客で学ぶこともある。回り道だが頑張りたい。来年度のことは決めていないがアパレル系にいきたい。
D	一人担任 15 人 3 歳児，2 クラス。ベテランの先生（子どものときからいた先生）がもう一方のクラス。手探りで毎日やっている。自分の出身園。親子遠足は緊張した，保護者の前で，バスガイドみたいに司会をした。褒められた，うれしかった。週案，おたよりを月交代でやっている。週案は，ざっくりと。だから書ける。
B	月に一回書いておわり。反省をしっかり書けと言われている。
D	子どもにイラッとするときがある。早い子遅い子 10 分以上差があって，そんなときにいろいろ起こると対応が難しい。フリーの先生が 2 人（中堅 30 代），活動によっていろんな部屋に入っている。主活動以外の場面では一人で子どもたちを見なければいけない。ピアノ，無理。月に 1 曲，学年でそれぞれ。運動習慣の歌もある。学校の授業で二年生後期にピアノないのはだめ！子ども歌をもっと弾いたほうがいい。7 時過ぎに帰宅。おたより，週案，月末に子どもへの個別のコメントを書いて提出。ピアノも練習しなければならない。
F	3 クラス 12 人 12 人 16 人で，16 人のクラスに入っている。先生は 50 人くらいいる。私のリーダー K 先生が，朝の子どもの状態を見て 2 人休みだと，違うクラスのお手伝いに行くように保育士を配置する。朝の保育の人数調整で保育士同士の人間関係がきつい。リーダーの先生がきつく，言い合いなどがある。言い方がきついので，意見などいいにくく従う方向に行ってしまう。2 年目の先生が，それが普通だと言っていたが，そうではないと思うが，言えない。
G	子どもはかわいい「先生」と呼んでくれるし，福利厚生もよい。
筆者	子どもたちにはどうなの？

F 手あそびやあそびをととてもよく知っていて、子どもたちにはふつう。40代の先生。

子どものかかわり、疑問に思うことがある。だけど、聞けない。そのままで終わっている。365日開園。シフトでやっている。夜は19時まで、子どもが帰ったら閉めていい。0歳児が増えている。

筆者 悩みは？

F 給料もっとほしい。5年目で15万円って、私より5千円しか上がってないって。心配だ。ボーナス安い。片手。同じ系列園で同年齢同士、交流がある。月一回程度。千人の大鍋、イベントに協力する。保育以外のいろんなことをさせられる。書き物は？経過記録を書いている。子どもの様子、月のねらいはリーダーが一つ考えるがそれ以外は自分で考える。手書きで記載している。わりと適当で、書いてあればいい。でも、保育用語を使わなければならない（おもちゃ→玩具 など）。

A 若くて同い年～平均年齢63歳。生活介護、お風呂介助や遊びや運動の提供、パソコンやったり、習字の紙を出したりするなど。新しい施設。一人一人の違いに合わせる。1年たったら正規になれるが、試験がある。楽しい、時間通り帰れる、持ち帰りの仕事がない。

G 書類が書けない。学生時代も同じだった。他の大学から来た同期保育士とも同じ悩みであるので、自分だけが書けないのではないと思った。でも、毎月主任保育士に赤ペンでたくさん修正される。

筆者 障害者施設で働いていて、利用者の問題行動などないの？

A 発作を起こすがいる。その対応はびっくりした。でもしょっちゅうあるわけではない。職員同士が楽しい。ボードや、サークル的な活動が楽しい。保育士が多い、職員も若い。給料はいい。保育にもどれない。利用者の年齢が高ければ、プライドがあるので難しい。

B とにかく10クラス300人台、クラス2人担任制。35人程度のクラス担任。バスにも乗る。早いので7時40分くらい。毎月、学年、クラスだより、今月の歌、誕生会の歌、をきめて手書きで書いている。指導案も書くことがある。初任給20万円もらえた。14時以降は、預かり保育なので、自分は事務仕事。持ち帰りの仕事はない。19時すぎまでかかる。毎週水曜日は理事長命令で18時半に絶対に帰りという日がある。明日から実習生が入る。

- D 給食時間内に食べ終わらない。お代わりにくる子、こぼす子がいる。大変。先生歴 30 年の人とペア。ピアノ弾けない。ペアの先生に弾いてもらっている。保護者との共通の話題がない。その子に対する具体的な伝達事項がない。家庭訪問は今年からなくなった。参観日は来月ある。
- F 全体像がよくわからない。子どもたちに対して iPad 導入した。2 人に 1 つくらい。
- C 保育園、2 歳児 12 人で副担任。主担任は 2 歳年上の女性。帳簿が…経過記録がいやだ。4 人分を書いている。下書き書いたら全部直されるので、嫌になった。昨日、保護者会の役員と園職員との飲み会に行った。言葉遣いに気を使った。むしろ保護者のほうがラフだった。手取りで 13 万円。園長先生から採用試験の要項をもらった。おたより B4, PC 入力。子ども、言うこときかずイライラする。でも、自分の気持ちをおしこす。ほかの先生だったら、おむつ替えは嫌がらないけど、自分が対応すると泣く。一番大変なのは気になる子。なぜ泣いているのかわからない、でも少しわかるようになってきた。発達が遅れている。言葉は 4 月生まれだけど 1 語文しか話さない。排泄は。おむつ。食べるのは普通に食べている。いつも一人で遊んでいる。ままごと。トイレで水遊びをする、ペーパータオルを水に浸して。絞って。遊んでいる。それを注意すると泣くが、ほかの先生が抱っこすると泣きやむ。気になる子の会議をしていて、経過を追っている。かわいいと思うが、だめなときがある。
- D 気になる子、家庭環境もある。言っていることが通じていない、理解していないと感じる人が多い。
その子は、午前中、眠い。午前中膝の上で目をつぶろうとする。でも昼寝は寝ない。家庭訪問で、家庭環境のいいところも悪いところも見えてくる。でも若いから、保護者にどうやって話せばいいかわからない。誰に相談すればいいかも知らない。

筆者 うれしかったことは？

- C 排泄の自立、うれしかった。
- D ボタンとめた、うれしかった。
- F 排泄、排便の自立。地域の仕事（大鍋づくり、ゴボウを切る）
- G 入社お祝い金をもらった。
-

アンケート結果と座談会での発話から、就職前から様々な不安を抱えながら保育者として働く選択をしたものの、子どもとのかかわり方や保護者対応、他者との協働など授業の中で学んだことを活かしながら、新しい環境に順応しようとする気持ちが推察された。

以上のことから、養成校での2年間の学びの中で様々な学習や実習を通じて経験してきたことを振り返りながら、新任保育者として子どもたちから「先生」と呼ばれたり保護者から褒められたりという経験をすることで、喜びを感じていることがわかった。また、経験豊富な主任保育者から、指導も多く、消極的になり、自分の意見をうまく伝えられないこともわかった。実際に配属された園の一員として不安や悩みを軽減し、働けるようになるためには、卒業前から保育者への移行期間に、自身が就職先に選択した場に必要情報の提供に時間をかけて、個別に教育相談をする必要があるのではないかと考察される。上記の結果と先行研究を踏まえ、卒業前や卒業後の不安や悩みを少しでも軽減するための具体的な方策についてさらに考えていく必要性が示唆された。

6. 今後の課題

本研究の対象者は単一の保育者養成校で学ぶ学生のみを対象とした。したがって、他の養成校の学生及び卒業生の実態については明らかにすることができなかった。また、参加者数についても複数年度を対象としたが、段階的な調査を行うには限定的であった。上記の点からも、今後は複数の養成校に所属する対象者を対象とした継続的なデータの収集が必要だと考える。

現在の保育制度の転換期において、養成校で学んだ保育者に求められる専門性は非常に高いものであると思われる。分析結果から、保育現場では保護者、同僚、上司から学んでいることが明らかになった。したがって、林・新井⁴⁾(2013)が指摘するような

基礎的なコミュニケーション能力や気働きといった能力を形成する必要がある。そのためには、養成校段階での学びだけではなく、卒業後のフォローアップ体制の構築が重要であると考ええる。

7 謝辞

本研究を行うにあたり研究へご協力いただいた皆様に、深く感謝申し上げます。

8 参考文献

- 1) 海野展由 (2010). 保育者養成校における就職活動についての一考察—浜松大学こども健康学科の事例から見る保育現場への就職活動の特徴と課題— 健康プロデュース雑誌 (浜松大学) 第4巻第1号、55-63
- 2) 三木知子・桜井茂男 (1998). 「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』46 (2)、203-211
- 3) 石川隆行 (2005). 保育者を目指す短大生の保育者効力感について：2月の追跡調査より 聖母女学院短期大学研究紀要、34、96-99
- 4) 林牧子・新井美保子 (2013). 学生から保育者への移行期支援—若年保育者の不本意な離職・休職を防ぐために— 愛知教育大学 幼児教育研究、11-19